

事業のタネシート

活動地域・団体名：みやざきSDGsプラットフォーム

事業名称1：【持続可能なまちづくりとそれを担う人材の育成事業】

あらすじ

国内外の多様で先進的なまちづくりモデル事例を把握し、その事例をステークホルダーと共有、広く発信することを通じて、自治体や地域住民・企業等の連携が促進される働きかけを行う
また、国内外とのネットワーク支援を通じて若い世代の育成を行う

ストーリー

若者減少、人口減少、空き家の増加等々の大きな問題がある一方でその課題に向かう連携型の取組が育っていない。SDGsに取り組みたいと思っても、取り組み方がわからず足踏みしている事例が散見される。またSDGsに取り組む事が目的になってしまい、いびつな課題解決につながるケースもある。

高校生・大学生・地域の多様な人々が地域の課題や資源、解決するアイデアを真剣に考え議論する場をつくることで、ありたい未来ビジョンを実現する為の場を提供する。その結果として「SDGs未来都市」「自治体SDGsモデル事業」になりえる持続可能なまちづくりを目指す。

事業の骨子		現時点で想定される課題・ボトルネック
①ありたい未来	地域や人のゆたかな絆の中で、みんなが持てる力を発揮し、生き生きと活躍できる持続可能な未来	地域の課題や未来のことを「自分ごと」に出来ていない意識（ぬるま湯状態） 安定的に自走できる財源の確保
②課題	人口減少/若者流出/高齢化/コミュニティ機能の低下/コロナ禍による関係の希薄化の加速	
③なぜこの事業をやるのか（Why）	異なるステークホルダーが自分ごととして地域の課題解決と持続可能なまちづくりに連携して取り組む気運と風土を醸成する為	
④地域資源	産学官連携の土壌/人間関係の繋がりが強い マスコミ各社とのネットワーク	
⑤商品・サービスの具体的な内容（What）	「みやざきSDGsアクション」というタイトルで2023年1月～3月の期間中に高校生・大学生・企業等が混ざり合った勉強会、交流会、ワークショップ等の開催 マッチングの機会提供	
⑥担い手（Who）	本プラットフォーム	課題・ボトルネックを乗り越えるために力を借りたい人物・企業像
⑦事業で生じる循環	具体的な事業が動き出すことによる「環境」「経済」「社会」の総合的向上	
⑧事業で生じる成果	SDGsに取り組む自治体・企業の誕生・増加 持続可能なまちづくりに向けた、課題の洗い出しや地域の強み、アイデアが生まれる	

事業名称2：山のダイゴミプロジェクト

あらすじ

現在、伐採した木を加工し、建材や家具を生産する際に、木の約1割程度の部分しか活用されていない。残りの9割は規格外となり、バイオマス発電や畜産の敷物などへ加工、規格外の木材は商品としての活用が難しいが、形や大きさの違う素材それぞれに魅力があり、企画品とは異なる価値がある。つくり手と使い手が一緒になり、山に棄てていた資源を活用するプロジェクトを目指す。

ストーリー

木を伐採する際に発生し、山のゴミとして捨てられていた素材を、デザイナーと共に新しい商品開発を令和4年度に行ってきた。東京で活躍する株式会社良品計画、株式会社内田洋行の専属デザイナーによりデザインされたものを試作品として、令和5年2月には武蔵野美術大学市ヶ谷キャンパスでプロトタイプのお披露目会を行った。令和5年度に向けては、プロトタイプ「ダイゴミ商品」の商品化に向け、引き続き検討。量産体制がどこまで出来るか、無印良品の一部の店舗で限定商品としてテスト販売を行い、将来的には全国展開できるような商品として流通も含め可能になるかの検証を行う。

事業の骨子		現時点で想定される課題・ボトルネック
①ありたい未来	宮崎から発信する商品で、つかい手と作り手が繋がり、山や自然の保護を身近に感じられる。	林業という業種でも川上（植林・伐採）と川下（製材・流通）と関係性が薄く、地域内でのサプライチェーンが機能していない。材として活用できない林地残材が山にゴミとして放置されており、災害発災時に二次災害を起こす大きな要因となっている。
②課題	山に棄てられていた、枝、根株、受け口等が放置されたままになっている。また、再造林率が伸びていないため持続可能な林業となっていない。	
③なぜこの事業をやるのか（Why）	いままだ廃棄されていたものをデザインという付加価値を加えることで、商品として活用できる方法を宮崎から全国に提案。持続可能な社会作りを目指す。	
④地域資源	山のゴミ（間伐材・林地残材）の根株・枝・受け口等 地域の若手人材のネットワーク	
⑤商品・サービスの具体的な内容（What）	山のゴミ（間伐材・林地残材）の根株・枝・受け口を材料とした生活用品。壁に付けられる家具棚、パーテーション等を開発、販売する。	
⑥担い手（Who）	耳川流域森林組合・デクスウッド宮崎事業協同組合・（有）イエムラほかで構成されるプロジェクト・メンバー	課題・ボトルネックを乗り越えるために力を借りたい人物・企業像
⑦事業で生じる循環	山に棄てられていた素材を付加価値をつけて、生活用品として販売。利益の一部を伐採後の再造林時の苗代に充当することで、循環社会の構築に寄与する。	株式会社良品生活・株式会社内田洋行・武蔵野美術大学造型構想学部クリエイティブイノベーション学科・宮崎県
⑧事業で生じる成果	林業分野でも川下と川上で分断されていた業種に従事する人材が有機的に繋がるビジネスモデルとなる。また県外でSDGsの実践に貢献する企業と取引が生まれることにより新たな取組みが生まれる。	

事業名称3：放置竹林活用プロジェクト

あらすじ

現在放置竹林が林業の生産性悪化や土地利用価値減少等社会問題化している。従来は竹細工素材や農業等幅広い分野で活用されてきたが、プラスチック等代替素材が竹需要を減少させ、放置竹林増加の原因の一つとなっている。竹には有効成分や樹木とは異なる繊維質が牛向け飼料等へ活用できる可能性がある。この放置竹林問題解決のため、竹を国産飼料原料等への活用を目指す。

ストーリー

竹は従来食料、竹細工、建築及び農業等幅広い分野で利用価値が高かったため多くの場所で植林されてきた。一方、近年はプラスチック等代替素材の台頭により需要が低下し、竹林を管理するだけの付加価値を生むことなく放置されたことにより、放置竹林問題の解決が課題となっている。また、近年の為替変動やウクライナ問題による飼料価格高騰及び供給不安が肉用牛経営者及び酪農業者の経営を圧迫し、飼料自給率増加が国の課題にもなっている。これら課題を解決するため、竹の飼料としての価値を高めるため、2022年より(株)コーポレーションクリエイトや(株)川上木材と竹の飼料として価値や、宮崎県内の酒造メーカーを中心とする発酵残渣の資料価値の評価及び福岡大学と竹抽出液の成分評価を行い飼料化が可能か検証してきた。

事業の骨子		現時点で想定される課題・ボトルネック
①ありたい未来	放置竹林の管理することで、たけのこ、メンマ、牛の飼料等付加価値をつけ、放置竹林をなくし、国産飼料を供給する宮崎竹林モデルの普及。	竹の伐採や維持管理、竹の加工、竹の飼料としての流通を一貫したサプライチェーンの構築が課題となる。 竹の伐採・維持管理、竹の加工及び飼料でそれぞれの付加価値管理及び竹の飼料としての価値を高めるための分析が不十分である。 課題・ボトルネックを乗り越えるために力を借りたい人物・企業像 竹イノベーション研究会 佐藤教授、霧島酒造、宝酒造及び雲海酒造等大手酒造メーカー、宮崎県畜産試験場
②課題	現在の竹需要だけでは管理運営するだけの収益性がなく、持続的な竹林管理を行うことができない。	
③なぜこの事業をやるのか (Why)	今まで活用されていない分野に竹を供給することで竹に付加価値を与え、放置竹林から持続的な産業を生み出すことを目指す。	
④地域資源	多くの放置竹林 管理レベルの高い食肉用・酪農畜産業者むけ国産飼料の需要	
⑤商品・サービスの具体的な内容 (What)	竹を牛資料に適した破碎を行い、食品メーカーからでる搾りかすや発酵残渣を活用した飼料。竹抽出液の機能性の活用。	
⑥担い手 (Who)	(株)コーポレーションクリエイト、(株)川上木材、(有)梅里竹芸ほかで構成されるプロジェクトメンバー	
⑦事業で生じる循環	放置された竹林を資源として活用していくことで、放置竹林の管理による付加価値付与及び竹林の適正な管理により、循環社会の構築に付与する。	
⑧事業で生じる成果	宮崎県で放置竹林問題の解決が、国内自給率の改善にもつながることで、宮崎モデルが日本全国に波及し、同様に循環社会を目指す他県の企業との連携が生まれる。	